# 闇に寝取られし美人妻の末路

作者　大黒達也

闇に寝取られし美人妻の末路

『あらすじ』

暴力団の組長に狙われ、巧みな罠を掛けられる美人妻。仕掛けられた交通事故により、法外な賠償金を請求され、賠償金の代償として一か月、組長に奉仕することを強いられる

『登場人物』

黒木（くろき）　理沙（りさ）

美しい清楚な顔立ちを持つ美人妻。年齢二十八歳。身長百七十センチの長身でスタイルも抜群であり、男女を問わず、魅了してしま

う。その美貌のために暴力団組長に狙われ、陥穽に落とされる。

黒木（くろき）　健太（けんた）

理沙の夫であり、ごく普通のサラリーマンである。暴力団組長に最愛の妻を寝取られる。

権藤（ごんどう）　太一（たいち）

理沙の美貌と肉体をつけ狙う、暴力団組長。狡猾で残虐な性格の持ち主。

権藤（ごんどう）　麗華（れいか）

権藤の妻。年齢三十八歳。豊満な肉体を持

ち、男でも女でも愛せるバイセクシャル。理沙の美貌と肉体に溺れる。

『本編』

## プロローグ

東京都内にあるレストランから、一組のカップルが食事を終え出て来た。人目を惹く美貌の若い女が、痩せ型の男と仲睦まじく歩道を歩いていた。

歩道脇には、一台の黒塗りベンツが停車していた。後部座席に座っていた黒服の中年男が、女に視線を向けた。掛けていたサングラスを外し、食い入るように全身を舐め回した。

女のミニスカートから伸びる白い太腿を見詰め、唇を舐めた。

「いい女だ。おい。健。あいつ等の後をつけろ」

「へい。承知しました」

助手席に座っていた坊主頭で黒塗りの男がベンツを下り、二人の後方を歩き始めた。

その週の金曜日、黒木夫婦は、自家用車で都内にあるデパートに買い物に出かけた。

朝からずっと雨が降っていた。夏だというのに少し肌寒い感じだ。

夫の黒木健太三十二歳が、ハンドルを握っ

ていた。妻の〔理沙―りさ〕二十八歳が助手席でスマホを見ていた。

理沙は、ミス日本でも通用するような美女だった。ミニスカートの間から長くて白いすべすべの太腿が伸びていた。

その時、黒色のベンツが急な割り込みを掛けて来た。

「危ないな！」

黒木がクラクションを鳴らそうとしたその手を理沙が押さえた。

「止めておいた方がいいわ。何か危ない感じよ」

理沙が言うようにベンツの後部座席にには、パンチパーマを当てた男の頭部が見えていた。

車間距離はほとんど無かった。

その男が振り向いて、理沙の方を見て来た。

少しの間、見詰めてから前を向いた。

「車間距離を空けた方がいいわ」

「そうだな」

黒木が速度を落とすと、黒塗りのベンツも併せるように減速した。

「何だ？あいつ等」

その時、突然、ベンツが急ブレーキを掛けた。黒木も咄嗟にブレーキを強く踏み切ったが、間に合わなかった。轟音と共に激しく追

突した。雨で濡れた路面も災いした。

ベンツは後部のボンネットが大破し、黒木の運転するミニバンも前側が大きく損壊した。

二人はシートベルトとエアバックのお蔭で怪我を免れた。

「馬鹿野郎！」

ベンツの助手席が開き、黒色のスーツを着た若い男が、二人に向かって怒声を浴びせかけた。

黒色のサングラスを掛け、丸刈りにした男は、全身から禍々しい雰囲気を発散させていた。

「貴方の車が、急ブレーキを掛けたんで間に

合いませんでした」

黒木は上擦った声で答えた。

「通行人が飛び出したんだよ。危うく引き殺しそうだったんだ。何か？通行人を撥ねた方が良かったんかい！」

その男が言うように、男と同様な風情をしたベンツの運転手が、車道の中央に座り込んだ中年の男に声を掛けていた。

「貴方。警察を呼んだ方がいいわ」

「そうだな」

妻の理沙に促され、スマホを操作しようとした時、窓の外から男に取り上げられた。

「何をするんだ！」

「それはこっちの台詞だぜ。高級車を廃車にしやがって。頭(かしら)いや社長が事務所で話したいとよ」

「事故の時は、警察を呼ぶのが当たり前でしょう」

その時、別の黒塗りベンツが、二台の近くに停車した。

「つべこべ言わないで降りやがれ。組いや会社の車が来た。あれに乗るんだ」

「スマホを返して下さい」

「貴方。降りましょう。逆らっても無駄よ」

理沙が黒木の腕を押さえた。

「奥さん。解りが早いね。おい。お前。美人

の奥さんがそう仰られているんだ。早く降りろ」

一時間後、二人は暴力団事務所と思しき場所に連れ込まれた。

二人は並んで三人掛けのソファに座らされた。

「貴方達のお蔭で車が廃車になってしまいました」

二人の前には、全身白色のスーツを着た厳つい感じの中年男が座っていた。

「済みません。ただ、貴方の車が急ブレーキを掛けたんで間に合わなかったんです」

「通行人が飛び出したんで、こっちは急ブレーキをかけるしかなかったんです」

男は、穏やかな口調で言った。男の無遠慮な視線が、ミニスカートから伸びた理沙の白い太腿に注がれていた。

「どうしろと言うんですか？」

「頭。修理代と医療費の見積です」

「社長と呼ばんかい！」

それまで穏やかだった男の態度が一変した。書類を差し出した若い男の足を強く蹴った。

男は転倒し、すぐに起き上った。

「社長。申し訳ございません」

社長と呼ばれた男が、無言で書類を受け取

り、さっと目を通してからテーブルの上に置いた。

「車が廃車になったんで新車が必要になりました。新車購入までの間、事業が滞りますので、損害賠償請求をさせていただきます。それに同乗者の社員が鞭うちになりましてね」

事務的な口調だった。

「事業保証額で一億円にもなるんですか？」

黒木の声は震えを帯びていた。

「当然ですよ。一日で数千万円の売上ですから。保険を使ったらいいじゃないですか？」

中年男は狡猾な笑みを浮かべた。

「車両保険は無制限に加入していますが、貴

方の会社の事業費までは保障されません」

「だから？貴方達は私に損害を与えた。賠償するのが当たり前でしょう。家を処分すればいいじゃないですか？」

「うちは借家です。貯金だって僅かな物です」

「困りましたね。交渉が成立しなければ、お二人を帰す訳にはいきませんね。そうですかひとつ提案があるのですが」

中年男が麻衣の美しい顔をじっと見詰めた。

「何ですか？」

「奥さんを一か月私に預けてほしいんです」

「何だって！」

黒木の拳が震えていた。中年男は満面の笑

みを浮かべて、理沙の豊かな胸を見た。ブラウスの隙間に白く豊満な乳房が僅かに見えていた。

「貴方。落ち着いて」

理沙が、立ち上がりそうになった黒木の腕を掴んだ。

「理沙に何をさせるつもりだ？」

「一億ですよ。決まっているじゃないですか？料理をさせるつもりはありませんね」

男が身を乗り出してきて理沙の白い太腿に手を掛けた。

「この野郎！貴様……」

「わかりました。言う通りにします」

理沙は、黒木に最後まで言わせなかった。
黒木は妻の言葉が信じられず、理沙の横顔をまじまじと見詰めた。
「奥さんは美しいだけでなく、物分かりもいいですね」
「今日は帰らせてください」
理沙が落ち着いた口調で言った。
「いいですよ。お二人にも準備が必要でしょうから、三日後に迎えに伺います」
「帰るぞ」
黒木が立ち上がり、憮然とした表情で言ってから麻衣の腕を掴んで立ち上がらせた。
「そうだ。お迎えの際は、シャワーを浴びて

いてください。手間が省けますので」

男が事務所を去る二人の後姿に声を掛けた。

組長である権藤（ごんどう）　太一（たいち）が部屋を去ろうとする理沙の豊かな尻を食い入るように見詰め、生唾を呑み込んだ。

## 第一章　奴隷契約

その晩、黒木は理沙の裸身を貪るように抱いた。全身を舐りながら涙を流していた。この美しい裸身を暴力団の組長に犯されるのだ。理沙は夫の激しい愛撫に逝き続けていた。手で口を塞ぎ、喘ぎ声を必死に押さえていた。

一時間後、二人はベッドに横たわり、静かに話していた。黒木が理沙の尻を触り、理沙は黒木の男根を軽く扱いていた。

「何故。理沙は逆らわなかったんだ。お前の力を持ってすれば、ヤクザなんて簡単にやつけられただろう」

黒木は意外なことを口にした。理沙は百七十センチほどの長身ではあるが、見た目は人目を逝くほどの美女と言う以外、変わったところは無かった。

「奴らは拳銃を持っていたわ」

「どうして分かったんだ？」

黒木は隣で横になっている理沙の美しい横

顔を見詰めた。

「鉄と火薬の匂いがしたのよ」

理沙は見詰め返した。

「銃だって。理沙には通用しないだろう」

「貴方は撃たれたら死ぬわ。それに……」

「何だよ？」

「私が動けば組織に感ずかれるわ」

「また、組織の話か？何なんだよ。その組織って？」

「組織に具体的な名前は無いの。古（いにしえ）の時代から私達を付け狙っているのよ」

それを聞いた黒木は少しの間、口を閉ざした。

「なあ、行かないでくれよ」

黒木がベッドの上で正座して頭を下げた。

「一か月で戻って来るわよ。それに私はこれまで数え切れない程の男女に抱かれてきたの。貴方も知っているでしょう？」

「今は俺の妻だろう？」

黒木は理沙に強く抱き付いてキスをした。暫くの間、互いの舌を求め合った。

「そうよ。私の心は貴方だけのものよ。貴方にお願いがあるの」

「何だよ？」

「貴方の血が欲しいの。万が一のために力を付けておきたいのよ」

「もちろん。いいよ」

黒木は立ち上がり、寝室の隅に置かれた輸血セットをベッドの脇に置き、細い管に繋がった注射針を左腕の静脈に刺した。もう一方の注射針を理沙に渡し、ベッドに横になった。

黒木の血液が、理沙の体内へと流れ出した。

理沙は数百年の間、生き続けている吸血鬼一族のひとりだった。

吸血鬼といっても人間に危害を加えることは無かった。理沙は穏やかな性格で非常時でない限り暴力を振るうことはなかった。他人を傷つけることを極端に恐れた。

彼らは伴侶とした相手から定期的に負担のない範囲で輸血を受けてきた。伝説のように十字架や大蒜（にんにく）それに太陽を恐れることは無かった。

彼らは魔物ではなく、突然変異だった。寿命を左右するテロメアという遺伝子がリング状になっており、歳をとることは無かった。

体力は通常人の十倍以上で、再生能力も桁違いだった。銃創を受けても翌日には、傷は治っていた。

唯一の弱点は、血液を定期的に補充しなければならないと言う事だった。古代に於いては輸血セットなどなく、相手の肉体に傷を付

けて吸い、腸内で血液の成分を吸収することで対処していた。

彼らは、人間に存在を知られるのを恐れ、社会の片隅でひっそりと生きて来た。

そんな彼らを組織は付け狙った。永遠の生命を得たいがためだった。

三日後の朝、理沙はシャワーを浴びていた。浴室の前で黒木が唖然とした表情で立っていた。

曇りガラスに映る理沙の裸身を見詰めていた。

三時間後、マンションの駐車場に黒塗りのベンツが停車した。予め電話連絡を受けていた黒木夫婦が駐車場で待っていた。理沙は真紅のドレスを着ていた。前日に暴力団組長の権藤から送られた品だった。それを着て来るようにとの指示だった。

ドレスは太腿の付け根までスリットが入っており、白い太腿が覗いていた。下着は黒色のTバックだった。それも権藤からの贈り物だった。

黒木は助手席に、理沙は権藤が乗る後部座席に乗せられた。

「よく来てくれましたね」

走り出すベンツの中で権藤が、ドレスのスリットから覗く、白い太腿に手を置いて来た。

「約束は守ってくれますよね？」

助手席から黒木が権藤に聞いた。

「もちろん。但し理沙が帰りたいと言ったらの話だ」

権藤は満面の笑みを浮かべながら答えた。

理沙のことを呼び捨てにした。指先は理沙のパンティに侵入し、膣口を抉じ開けようとしていた。理沙は逆らわなかった。無言で窓外を見詰めていた。

一時間後、黒木夫婦は、組事務所ではなく、都内にある権藤の自宅に連れて行かれた。

都内の高級住宅地に建てられた、土地面積千坪、建坪数百坪はある白亜の豪邸だった。

「ここが理沙の部屋だ。理沙のために改修した」

二人が最初に案内された部屋は三階の南側に位置しており、広さは三十畳ほどもあった。

部屋の中央には巨大なダブルベッドが鎮座し、近くの戸棚には巨大な張形やバイブレータそれに浣腸器が収められていた。

部屋の片側には、拘束具が付いた簡易ベッ

ドが置かれていた。

部屋には広さ十畳以上のバスルームが備え付けられていた。壁はガラス張りで内部の様子が見えた。縦横二メートル以上はある浴槽には、既に湯が張られ湯気を上げていた。

備え付けのトイレもガラス張りだった。

突然、黒木は一緒に付いて来た二人の組員によって、一人掛けの椅子に座らされ、両手を背もたれの後ろに紐で縛り付けられた。

「どういうことだ？」

黒木の声は震えを帯びていた。理沙は黙ってその様子を見ていた。

「これからショーを始めるんだ。お前に暴れられたら興ざめだからな。理沙。こっちに来るんだ」

権藤が、理沙をダブルベッドに座らせた。

「お前。落ち着いているな。俺が怖くはないのか？」

「怖いわ」

理沙が権藤の目を見ながら言った。

「それじゃ始めるとするか」

その時、ドアをノックする音が聞こえて来た。ドアが開き、三十代半ばくらいに見える女が入って来た。

「貴方ひとりで楽しむなんてずるいわ。私だ

って楽しみたいのよ。へえ。凄く可愛い子ね。食べちゃいたいわ」

権藤の妻である麗華(れいか)だった。

「悪いな。お前のことを忘れていたよ」

権藤は頭を掻いた。

「二人で楽しむ約束だったでしょう？」

「わかった。そこで見ていろ」

権藤は、ズボンとトランクスを脱いだ。鬼頭に真珠を埋め込んだグロテクスな男根が天を突いていた。

「止めろ！止めてくれ」

黒木が涙を浮かべ、懇願した。

「メスってのはな。強い男に惹かれるんだよ。

お前のように無力な男は黙って見てるしかないんだよ。お前等、そいつの口を塞げ」

黒木の背後に直立不動の姿勢で待機していた組員二人に命じた。黒木はひも状にしたハンカチで口を塞がれた。

## 第二章　寝取られる美人妻

「まずはシャブってもらおうか」

里奈の髪を鷲掴みにして、股間に引き寄せた。理沙は逆らわなかった。何をしても無駄と心得ていた。理沙の可愛い口が開かれ、鬼頭を舐め回した。手で睾丸を触りながら、ゆ

っくりと口で押し包み、舌先で鬼頭を舐めながら吸引した。

「この女、眩いだけでなく、テクも一流だぜ」

権藤の声は上擦っていた。ゆっくりと腰を前後に動かした。理沙は喉の奥を突かれ苦しそうだったが耐えていた。吸血鬼でも苦痛は感じるのだ。

椅子に縛り付けられた黒木が震えていた。涙を流し二人の様子を見ていた。最愛の妻が、目の前でヤクザの男根をしゃぶらされているのだ。耐えられるものでは無かった。

権藤の腰の動きが激しくなった。背筋を仰け反らせるようにして、理沙の口内に精液を

迸らせた。

「全部。呑み込め。一滴も漏らすなよ」

理沙は、生臭い精液を呑み込んだ。

「今度は私の番ね。ここに立って頂戴」

二人の様子を近くで食い入るように見ていた麗華が理沙に命令した。

理沙は素直に従った。

「背が高いわね。それにスタイル抜群ね。服を脱いで頂戴。下着も全部脱いで全裸になって」

理沙は無言で着ていた衣服を脱いでいく。

ブラジャーを外した際には、零れ落ちた形の良い白い乳房が全員の視線を貫いた。ため息

を漏らす者もいたほどだ。続いてTバックのパンティを脱いだ。

誰もが見たことのない極上の裸身が現れた。

少しの間、皆無言だった。

「毛が無いじゃない！」

麗華が上擦った声で言いながら、股間に顔を近付けてきた。恥毛が生えないのは生まれ

つきだった。まじまじと見詰め、鼻を押し付け、匂いを嗅いだ。

「いやらしい匂いがするわ。とってもそそるわね」

理沙の白い尻に手を回し、膣口に口を付けた。舌先でクリトリスや膣口を舐め回した。理沙の白い尻が無残に震え戦いた。肩先ががくがくと震えていた。同性に嬲られるのは久し振りのことだった。

「もう止めてください」

流石に強い羞恥心を感じていた。快感に悶える姿を見られたくは無かった。麗華の舌技に溺れかかっていた。既に軽く逝かされそう

だった。

「止めてもいいの？アンタ感じているんじゃない？」

上目使いに見詰めて来た。再び股間に口を付け、縦横無尽に舌で舐め回した。

「あああ……駄目！逝きそう」

理沙は目を閉じて歯を食い縛り快感の波に耐えていた。

「駄目よ。そんなに簡単に逝っちゃ」

麗華は、理沙が逝きそうになると、愛撫を止めた。それを何度も繰り返した。麗華の柔らかい舌による愛撫は狂おしいほどに絶妙だった。理沙のシミひとつない白い尻が、妖し

く動き始めた。

「あああ。駄目。焦らさないで……」

「何だって？声が小さくて聞こえないよ」

「お願い……。逝かせて下さい……」

囁くように懇願した。もう耐えられなかった。立っているのも苦痛だった。麗華の肩に全身を預けていた。

「だったら、今度はお前の美しい尻を見せるんだよ」

理沙は、ベッドの端に両手を突いて、麗華の方に剥き卵のような尻を突き出した。

無毛でピンク色のきれいなアヌスが見えた。

麗華は堪らなくなり、尻の割れ目に顔を押し付け、アヌスを舐った。

「あああ。逝く。逝っちゃう！」

鋭い喘ぎ声が部屋中に響き渡った。理沙はアヌスを舐られながら、背筋を仰け反らせるように絶頂に達した。

「どけ！」

全裸になった権藤が、麗華を押し退け、理沙をベッドの上にうつ伏せに横たえ、尻の割れ目に顔を入れ、激しく舐った後で、真珠が入った鬼頭を膣口に挿入した。狂ったように理沙の白い尻に腰を打ちつけた。

「おおお。何だこりゃ！締まり過ぎだぜ！」

権藤は驚いた表情で男根を引き抜いた。一瞬で逝きそうだったからだ。それほどまでに締め付けが強かった。こんな女は初めてだった。息を整え、再び膣口に凶悪な男根を突き入れた。今度はゆっくりと腰を動かした。

理沙は、膣壁を擦りつける真珠を入れた男根の動きに腰を合わせていた。

もう何も考えられなかった。髪を振り乱し、泣き叫んだ。

「あんたの奥さん。落ちたようね」

麗華が、椅子に縛り付けられて、一部始終を見せ付けられた黒木の耳元で囁くように言った。

「何？これ？アンタ、可愛い奥さんを寝取られて欲情しているわけ？」

「……」

麗華が、ズボンの上から勃起した男根を握り締めた。黒木のズボンを降ろし、トランクスを脱がせた。男根は極限まで勃起していた。激しい嫉妬を感じながらも、これまで感じたことのない快感を覚えていた。

麗華は、黒木の男根を数回手で扱いてからパクリと呑み込み、激しく吸引した。

余りの快感に猿轡の間から喘ぎ声が漏れた。射精しそうになった時、口腔性交を止め、黒木の膝に跨り、男根を濡れた膣に挿入された。

麗華は己が乳房を揉みし抱きながら激しく腰を上下させた。

絶頂が迫っていた。ベッドの上では、権藤が理沙を仰向けにさせ、白い太腿を大きく広げさせ、膣を犯していた。背中に彫られた龍の入れ墨が揺れ動いていた。

理沙は快感のあまり半ば意識を失っていた。権藤は理沙の寝ても崩れない白い乳房を存分に味わいながら、腰を緩慢に振っていた。

黒木は妻の逝きまくる姿を見ながら、麗華の膣内に放出した。

その晩、黒木ひとりがマンションに帰された。理沙がいない部屋は伽藍として空虚な感じだった。

食欲は無かった。そのまま、寝ることにした。寝室に入った時、スマホの呼び出し音が鳴った。

理沙からの電話だった。

「理沙か？」

「理沙じゃなくて残念だな」

権藤の野太い声が聞こえて来た。

「何の用だ？」

黒木の拳が震えていた。

「お前の家にもＰＣぐらいあるだろう。ブラ

ウザを開いて、これから言うキーワードを入力してみろ。良いものが見えるぞ。極上のポルノだ。キワードは……」

黒木は取り敢えず、キーワードをメモ帖に書いた。電話はそれで切れた。

寝室にあるパソコンの電源を入れた。ブラウザを立ち上げ、権藤に伝えられたキーワードを入力した。そのページは、理沙の寝取られ日記というタイトルだった。

ページの左上に今日の日付けのリンクがあったので、それをクリックした。タイトルは風呂でのエッチだった。

リンク先はライブ映像だった。日中に連れ

て行かれた理沙の部屋が映し出された。

理沙は、権藤と風呂に入っていた。広大な浴槽の中で、理沙は口腔性交を強いられていた。

権藤の図太い男根を美味しそうに舐めていた。黒木には理沙が楽しんでいるようにさえ思えた。

嫉妬の余り、パソコンを叩き壊そうと思ったが、何とか自分を抑えた。その後は、画面から視線を外すことができなかった。

「尻を見せろ」

理沙は命じられるままに、浴槽の縁に両手を突いて、権藤に美尻を向けた。

権藤は理沙の腰を両手で掴み、乱暴な感じで挿入した。理沙の膣が根元まで男根を呑み込んでいる様子がクローズアップされた。権藤が腰を動かすたびにクチュクチュといやらしい音が聞こえて来た。理沙は片手で口を押え、必死に喘ぎ声を漏らすまいとしていた。

権藤は、一分ももたなかった。理沙の中に

白濁した精液を注ぎ込んだ。黒木には理沙の膣がいかに締りが良いかわかっていた。権藤は良く持続できた方だ。

権藤は理沙の髪を掴み、男根に顔を押し付けた。

「きれいにしろ」

理沙は命じられるままに口で男根を清めた。

動画はそれで終了だった。黒木は暫し唖然とした表情で男根を舐め回す理沙の静止画像を見詰めていた。

翌日、黒木は会社を休んだ。上司には親戚に不幸があったと嘘の理由を伝えていた。

電話で三日の有給を申請し許可された。土日を入れると連続五日間会社に行かなくてよかった。

あまり食欲が無かったので冷蔵庫にあった冷や飯をレンジで温め、バターを溶かして食べた。

食事が終わる頃、スマホが鳴った。理沙からのラインだった。内容は動画を更新したとのことだった。権藤が入力したのであろう。

黒木は、見るかどうか少しの間、躊躇して

いた。内容は予想できた。

しかし、自然と体が動いていた。パソコンの電源を入れ、ブラウザを立ち上げた。

お気に入りに登録した権藤のページを開いた。

動画の中に今日の日付けであるリンクを見つけた。タイトルはアナル拡張だった。

手が勝手にマウスを操作し、リンクをクリックした。理沙の部屋が映し出された。

今度は風呂場ではなく、ガラス張りのトイレだった。

全裸にむかれた理沙が、便座に両手を突いて尻を後方に突き出していた。全裸で腰に張

形を装着した麗華が巨大な浣腸器を理沙のアヌスに差し込む様子が映し出された。

「お願い。それはいや！」

理沙が涙声で懇願していた。

「ここも開発しなきゃね。旦那の趣味なのよ」

麗華は冷たい笑みを浮かべながら、一気に浣腸液を注入した。理沙が眉間に皺を寄せ、苦痛に耐えていた。美尻が無残に震え戦いていた。浣腸は一回では終わらなかった。

数回繰り返された。理沙の腹部が大きく膨らんでいた。

「お願い。させて下さい」

「いいよ。見て居てあげるから、すっきりしたらいいよ」

理沙は、麗華に一瞬、恨みの籠った視線を

向けてから、ガラス製の便座に跨った。すぐに排泄音が聞こえて来た。便器もガラス製なので排泄物が噴出する様子が見えた。

「こんなにきれいな顔をしているのにウンチの匂いは同じなんだね。鼻が曲がりそうだよ。まったく」

排泄の後で、ウォシュレットでアヌスを洗い清めてから、麗華は、理沙の首輪に結ばれたロープを引き、隣接する広大な浴室へと連れて行った。

浴室では権藤が待っていた。

「今日は理沙のアナルを開発してやる。後ろの穴も気持ちがいいぞ」

「そうね。どこまで広げられるかしら。楽しみね」

麗華が、理沙のアヌスに指を根本まで差し込み、かき回した。理沙の白い尻が震えていた。

その後、二人は笑いながら乱暴に理沙をプールのような浴槽に投げ込んだ。

二人も飛び込んで、理沙の裸身に纏わりつき、膣口やアヌスに指を入れ内部を掻き回した。

理沙は逆らわなかった。権藤に口を吸われていた。理沙は目を閉じて舌を与えていた。

その後、理沙は浴室のタイルの上で四つん這いの姿勢を取らされた。

麗華が理沙の背後に座り、尻の割れ目を覗き込んだ。

「本当にきれいなアヌスね」

そう言って息を吹きかけてきた。理沙の背筋に悪寒が走り抜けた。続いてアヌスを舌で突かれた。

「あああ。駄目。そんなとこ舐めないで」

「いいぞ。麗華。もっと舐めてやれ」

近くで権藤が、理沙がアヌスを舐られる様子を男根を扱きながら食い入るように見詰めていた。

「まず、指二本から始めるわね」

麗華は、理沙のアヌスを十分に舐ってから、アヌスに二本指を差し込んだ。

理沙が背筋を仰け反らせ、身悶えした。

「凄い締め付けるわ！チ＊ポ入れたら五秒ともたないわね」

「そうか？そいつは楽しみだ」

権藤が理沙の前に周り、床に座ってから男根を口に含ませた。理沙は直腸内を指でかき回される悍ましさに耐えながら必死に男根をしゃぶった。

「今度は三本にするね」

満面の笑みを浮かべながら、指を三本束ね、

理沙のアヌスに差し込んでいく。理沙は冷汗をかきながら耐えていた。

最後には、直腸内に麗華の手が収まった。拳骨にした手を前後左右に動かした。まるでアヌスが巨大な男根で犯されているかのようだった。

理沙は直腸を犯される痛みに髪を振り乱し、泣き叫んだ。

仕上げとしてアヌスに図太い張形を挿入され、ゴムバンドで固定された。

それから二人は、ぐったりとした理沙の裸身を液体ソープで洗った。三人で湯に浸かった後に二人は理沙の裸身をタオルで拭いてか

ら、広大なダブルベッドに横たえた。

二人は同じベッドに横たわり、毛布をかぶってから、理沙をサンドイッチにするように裸身に抱き付いた。権藤はカメラに向かってVサインを送ってきた。

黒木は一部始終をブラウザで見ていた。視線を逸らすことは無かった。ズボンとパンツを脱いで己が男根を扱いていた。

愛する妻が麗華からアヌスにフィストファックを受けている場面では、射精もしていた。

辛くないわけでは無かった。三人で仲良くベッドに入り、これから眠りにつくところを見せ付けられ、嫉妬で気が狂いそうだった。

理沙がどんどん離れていく感覚に無力感を味わっていた。

翌朝、三人はほぼ同時にベッドで目覚めた。

「朝からビンビンだぜ」

権藤が、理沙の裸身を抱き上げ、浴室へと向かった。理沙は無言で天井を見上げていた。

「あんた。朝から元気ね」

麗華が欠伸をしながら、二人の後に付いて行く。

浴室に入り、権藤は理沙の裸身を床にうつ伏せの姿勢で横たえた。ペニスバンドを固定

していたゴムバンドを腰から外し、ゆっくりと引き抜いた。

「何故だ？」

ペニスバンドを抜いた後のアヌスを驚いたような顔で見詰めていた。通常であれば肛門は開き切っている筈だが、きつく閉ざされていた。

指を入れてみた。指先を締め上げられる感覚は、昨日のものと変わらなかった。

「入れてみたら」

麗華に促され、理沙を床に四つん這いの姿勢を取らせ、背後に周り、少しの間、舐ってからアヌスに怒張した男根を突き入れた。理

沙が鋭い喘ぎ声を漏らした。

理沙の腰を押えつけ、腰を前後させた。

「駄目だ」

あまりの締め付けに十秒ともたなかった。

アヌスから男根を抜いて床に尻餅をついた。

無毛でピンク色のアヌスから白濁した精液が零れ落ちた。

「一晩拡張したのに不思議ね」

「まあ、がばがばになっても困るが、これでは締まり過ぎだ」

「ねえ。試してみない？」

「何をだ？」

「若い衆に理沙のアヌスを犯させるのよ。数

十人に犯され続けたら少しは緩くなるんじゃないかしら」

「そうだな。今夜試してみよう。黒木の野郎にも生で見せ付けてやるか」

第三章　肛虐の嵐　へと続く